

とめ見覺不申候利休手前は、凡慮を離れたるよし常に語しと云傳あり、

〔茶傳集 十二〕一秀吉公の御前にて、利休宗久に廻り立被仰付候、利休無事に茶立其次ニ宗久茶立申迎、殊之外せきてふるへて、天目臺に湯を落を、秀吉公御覽被成、宗久より利休上手の由被思召、其後利休に茶の湯御習被成候、名物の臺に湯を落し跡付、今ニ跡うせ不申候故、瑕になり申由仰三齋 細川也、

〔甲子夜話 四十六〕松浦鎮信茶湯ヲ以テ名高キハ、世人皆知所ナリ、常ニ申サル、ハ、茶ハ遊戯ナレドモ、其中ニ武邊ノ心得コモルコトナリ、イカニトナレバ、物事一トシテ心付ザルコトナク、隅々迄届キ、立前ノ手續モイサ、カ油斷ナキヤウナラザレバ叶ハヌ也、又定法ノ外、時ニ臨ミテ作前アル所、其人ノ才智ヲ見ルベシ、コレヲモテ心得トセバ、武邊モ皆カクアル可シト申サレシトナリ、

臺子作法

〔茶話指月集 上〕ある時豊臣關白秀吉公、始て千宗易に臺子の茶湯仕べきよし仰出さる、そのころ辻玄哉といふもの古來の臺子をしる、宗易玄哉所へゆきて古流をならひ、御殿においてつかうまつる、公上覽の後、われもむかし臺子をならふ、汝が茶湯格にたがふところあり、奈と御尤候を、宗易、古流はそこ／＼品おほくおもはしからず候により、略して仕候と申上る、公さては、其ならひしらざるにあらず、最におぼしめす、向後茶に嗜るめん／＼、宗易が臺子見ならふべきよし仰られ、却て御感に預る、夫より千家古流を聞、利休が當流相承し來る、

〔和泉草 〕眞臺子手前

一茶筌置に茶筌茶巾仕込、長茶杓あをむけて置持出、左の膝の脇に置て臺子の前へ寄、長盆臺子の天井の端へ兩手にて引出シ跡へ少シナリ、長盆臺子の前へ下シ、水指の前目當能所に考置、身構居住居する也、